特別公開講演会より

ガンジーとその人間主義

ベッド　P・ナンダ

ありました。本当に素晴らしい力強い人間でありました。人々に対して啓発を与え、インスピレーションを与える存在でありました。そして、人々に人間の尊厳と人権について教え、インドの独立を勝ち取ったのであります。

ガンジーは、その生涯を通して、多くの人々の人生に、また生命のさまざまな側面に対して影響を与えました。したがって、限られた時間の中でそのすべてをカバーすることはできませんが、本日はガンジーの生涯の一部をかいつまんでご紹介し、いかにこの人物が

「三つの言葉」

マハトマ・ガンジーも、マーティン・ルーサー・キングも、そして、池田SGI（創価学会インタナショナル）会長も、人類にとってもっとも大事である「徳」あるいは「価値」を体現しておられると実感しております。

これから少しお時間をいただきまして、マハトマ・ガンジーについてお話したいと思います。ガンジーは二十一世紀のインドにおいて、ひときわ高くそびえ立つダイナミックな人物、カリスマ性にあふれた人物で

多種多彩な才能を持っていたか、どれほど多くの人々に示唆を与え、人類にどれほどの愛情を注いでいたかということを理解していただければと思います。

まず初めに、「三つの言葉」を引用したいと思います。一つは、アルバート・アインシュタイン、もう一つがマーティン・ルーサー・キング、そして三番目が池田SGI会長の言葉であります。

まず、アインシュタインの言葉です。彼は、「後世の未来の人々は、このような人物がかつてこの地上に存在したことを信じられないであろう」と述べています。

次に、マーティン・ルーサー・キングは、このように言っています。「ガンジーは必然であった。彼は、その生涯を通して人類に対して啓発とビジョンを与え、世界平和と調和のために世界そして人類を進化させた」。

池田会長はガンジーについて要約すると次のように述べています。「マハトマ・ガンジーは全体的な生命に対するアプローチをとっていた。そして、分断と孤立を統合と調和へと導いた」。

マーティン・ルーサー・キングと池田SGI会長の言葉にも示されているように、ガンジーの生涯の使命とは人類に対して調和と平和をもたらすことでありました。ガンジーは、マハトマ、すなわち「偉大な魂」、あるいは「大聖」と呼ばれていました。なぜかといえば、ガンジー自身が自分自身の啓発と、その悟りの旅を続けていたからであります。自分自身がこの地球に神の王国を実現しようと試みたからであります。

結実する〝差別〟撤廃の運動

ガンジーの旅は、弁護士としておもむいた南アフリカで始まります。そこで彼は、人々が非常に困難な生活をしていることを知ります。つまり、白人でない有色人種にとって人生がとても困難であることを体験したのです。人種差別（アパルトヘイト）です。

彼はその後、自分が生きようと思った道を進むことによって自分自身の生涯のみならず、インドの歴史と世界の歴史、人類の歴史を大きく変革することになるのです。

あるとき、ガンジーは所用のためにダーバンからプレトリヤに向かう列車に乗りました。一等車の席に座っていました。すると、その車両に白人の乗客が乗って来ました。それを見た車掌はガンジーに、「あなたは有色人種だから、白人に席を譲って貨物車に移りなさい」と言ったのです。ガンジーは、「私はこの一等車両の切符を持っているからここに座っているのだ。出て行く必要はない」と拒否しました。すると、今度は警察官がかけつけて、ガンジーの荷物を車両からホームに投げ捨てました。そして、出て行けと言ったのです。

この体験はガンジーにとって最も屈辱的なものであり、それまで経験したことのないものでした。しかし彼は、屈辱を感じると同時に、人間が同じ人間をこのように扱うことは許されないことであると深く心に刻むのです。

マハトマ・ガンジーは、インドにいる不可触民の人たちをハリジャン、すなわち「神の子」であると教えた人です。不可触民の人たちこそが「神の子」であるから私たちは彼らを敬うべきである。私たちはもっと彼らと親しくならなければいけない。ガンジーはこのように訴えました。

ヒンズー教は、「人間は平等だ」と説いています。そのヒンズー教にとって、この不可触民という考え方は汚点である。ガンジーはそのように教えました。私たち人類は皆一つの家族である。私たちはこのような制度を決して許してはいけない。決してそのままにしておいてはいけない。これを変革しなければいけない。このようにガンジーは教えたのです。

これに関連して、ガンジーは、一つの素晴らしい体験を通して私たちに非常に重要なことを教えてくれています。ガンジーが生まれ故郷であるインドのクジャラートに宗教共同体、アシュラムの道場をつくったときのエピソードがあります。彼は、この場所にはだれが来てもよい。このアシュラムの道場のルールに則って生活をする人であれば、だれを差別することもなく、すべての人を受け入れる、と言っていました。ここへ来て祈りを捧げてもよいし、瞑想してもよい。このアシュラムは平和と調和の場所だ、と語っていたのです。

ある日、このアシュラムに一通の手紙が届きます。それは、ガンジーの知人からの手紙でした。手紙には、「不可触民の家族がアシュラムで生活をしたいと言っているけれども、どうしましょうか」と書かれていました。「彼らはこのアシュラムのルールに則ってここで生活をしたいと言っています。ガンジーさん、あなたは彼らを受け入れますか」という内容でした。

当時、インドにおいて不可触民の人は、その言葉のとおり人々が触りもしない、だれも近寄らない階層の人々でありました。そういった時代でしたので、この家族をアシュラムに受け入れることはガンジーにとって大きなリスクでありました。

ガンジーはもちろん心から歓迎したかったし、イエスという返事をしたかったのです。でも、一応、周りの人にも意見を聞いてみました。もし彼らが嫌だと言っても自分が説得することができると確信していたからです。そしてその通りに、否定的な人たちを説得し、大歓迎でこのハリジャンの家族（夫婦と小さな子ども）をアシュラムに迎えることになりました。

この家族が実際にアシュラムに到着すると、中には彼らに対して抵抗感を示す人たちも出てきました。そしてアシュラムを出て行く人たちもいました。また、いままでこの共同体を運営するために資金を提供していた人の中にも資金の提供を全くやめてしまう人も出てきました。そのため、わずかな人しかアシュラムにはいなくなり、だんだん資金不足になり、お金も底をついていく事態が発生しました。

しかし、ガンジーは「私の決断は間違っていなかった。それは適切であった。もし、資金が底をついてしまうのであれば、私たちがここを出て行って、ハリジャンの人たちが住んでいる地域へ行って暮らせばよい。そこで新しく生活を立て直せばよいのだ」と断言しました。ところが幸いなことに、次の一年間は何とか生計を立てていくことができる資金を提供する匿名の人物が現れたのです。

こういったエピソードは私たちに何を教えてくれているのでしょうか。それは、ガンジーが、どんなに資金が枯渇してしまおうと、またたとえ社会全体が見捨

てたとしても自分は絶対に彼らを見捨てないのだという一貫した気持ちを持っていたということです。

だれ人であれ、社会は決して放棄してはいけない、追い出してはいけない、見捨ててはいけないということを、このエピソードを通して私たちは学ぶことができるのではないかと思います。まさにガンジーの人間性、人間愛、人権に対する考え方、人間の尊厳に対する信念を物語っているエピソードではないかと思います。

こうしたガンジーの努力がいま結実しています。インドでは、いまだに不可触民（ハリジャン）の人たちが全く差別をされていないわけではありません。しかし、さまざまな法律もできています。また、政府の中でもさまざまな要職に就き活躍をするハリジャンの人たちが出てきています。例えば、インドの前大統領もハリジャン出身であります。また、最高裁判所、あるいは立法府にもハリジャン出身の人たちがいます。また、教育機関、そして大学の総長、副総長にもハリジャン出身の人たちが出てきています。

ガンジーの生涯を賭けた運動が、いま実を結んでいるのです。もちろん、まだまだ改善しなければならない部分はたくさん残っています。しかしながら、このような結果はガンジーが間違っていなかったことを物語る証であると思います。

勝利を飾る非暴力の抵抗運動

また一方で、ガンジーは武力の行使を全く伴わずに、暴力や力、あるいは強制といったものを用いずにインドを独立へと導いています。そして、この国際社会の中でインドが声を上げることを可能にさせたのです。

皆様の中にはガンジーがこの運動のために使ったインドの言葉を聞いたことがある方もいらっしゃるかと思います。「サティアグラハ（Satyagraha）」という言葉です。

「サティア」とは「真理」という意味です。すなわち、愛です。「グラハ」とは決意の堅さ。強制をせず、武力や力を行使せずに抵抗をする、不服従という意味であります。つまり、これは市民的不服従、あるいは

無抵抗の不服従と訳すことができるのかもしれません。つまり、法律を破る場合もある、しかし、そこには暴力は伴わない。また、強制とか武力も伴わないということです。そして、人々を強制的に変えるのではなくて、非暴力の行動で人々の考え方や行動を変えていこうというのが、この運動でありました。

ガンジーの運動の例を二つ紹介したいと思います。一つは、一九〇六年八月、ガンジーがまだ比較的若いころに起きた出来事です。これは、ガンジーがサティアグラハを初めて提唱し、この運動を始めたころでありました。当時、ガンジーは南アフリカにいました。南アフリカの一つの州の政府が、この州に住んでいるインドの国籍を持つ人々は、政府に登録をして、身分証明書を持たなければならない、そして外に出るときは必ず身分証明書を持っていなければならない、という法律を施行しました。もし身分証明書を持っていない場合、あるいは登録をしない場合には強制送還されたり、国から出国を命じられたり、あるいは刑務所に収監されてしまう法律だったのです。

それに対して、ガンジーは南アフリカのその州に住んでいるインド人たちに呼びかけて、この政府の法律に抵抗しよう、でも、その抵抗は非暴力の方法でやっていこう、と言いました。政府に協力するのはやめよう、しかし平和的に暴力を全く用いずにやっていこうではないか。そして、もしこれに成功すれば政府はこの法律を撤回することになる。そのように訴えました。

ガンジーはこの運動に賛同を示した周囲の人たちと一緒になって、運動を展開し始めます。人々に、この運動がどんなリスクをはらむかも教えていきました。そして、一緒にこの抵抗運動に参加しようではないかと呼びかけていきます。

この法律を認めず、従わない、と抵抗をしたことで、実際に何千人もの人が逮捕されました。ガンジー自身も逮捕されます。それでも抵抗運動は治まらず、余りにも多くの人が逮捕される事態となったので、政府は何らかの妥協策を見出さなければならなくなったのです。

ガンジーの生涯を振り返ってみますと、彼は常に一つの目的を人々に与え、そして皆と一緒になって、ま

た人々を募って、その目的を達成するために一緒に闘った人生ではなかったかと思います。

先ほどの南アフリカのエピソードに戻りますが、最終的には政府もガンジーと妥協点を見出します。インド出身の人たちは、登録をする必要があるけれども、身分証明書を常に携帯する必要はない。しかも、身分証明書に関しては強制ではない。持ちたければ持ってもいいというところまで妥協しました。政府としては、インド出身の人たちを把握しておきたいので、とりあえず登録だけはしておいてくださいということになったのです。

最終的には登録をして身分証明を携帯する、との法律そのものが撤回されました。ガンジーも、それに同意しました。そして、自分自身も仲間の何人かの人たちと一緒に登録に行きます。ところが、その登録に行く姿を見て、この運動にガンジーと一緒に参加していた、登録制をも廃止するべきだと考えていた人たちの中には、「なんだ、ガンジーは裏切ったじゃないか。一緒にこの政府の法律に抵抗しようと主導していたのに、私たちを裏切ったじゃないか」と非難して、彼を殴ったり蹴ったりします。ガンジーはけがまでするほど、大変な暴行を受けてしまいます。

そうしますと、今度はガンジーに暴行を加えた人たちをどうするのかという問題が発生します。しかしガンジーは、「彼らを罰する必要はない。彼らは私が間違っている、私が裏切ったと思っているのだ。私が彼らに話をし、説得をし、対話をします」と言って、彼らを罰しようとはしませんでした。

ガンジーの取った行動は、たとえ自分と同じ考えを持っていない人であったとしても、対話を通して、話し合いを通して、対立は必ず理解に変えていくことができることを実践した、あるいは証明した一つの例ではないかと感じます。やがて、ガンジーに暴力を加えた人たちは申し訳なかったとあやまってきます。ガンジーは常に、このような非暴力という方法を取りながらその教えを説いていったのであります。

このような形でガンジーは非暴力、つまり、精神の力で対立者の考え方さえも変えていくことを実践したのであります。ガンジーによると、この非暴力の力は個人に力を与えるものである、そして、自分たちが世界にもたらしたいと思う変革は、自分たち自身が実践していくものである、と教えています。

その後、一旦は法律を撤回した政府が、もう一度法律を制定すると言い出します。つまり、インド出身の人たちは裁判所に行って登録をして身分証明書を常に携帯しなければいけない、と言い始めました。ガンジーは、これに断固として反対します。自分は絶対にそれをやらないと言います。そして、既に取っていた身分証明書を燃やそうと皆に呼びかけ、何千人ものインド出身の人たちがこの身分証明書を燃やします。そして、彼らは逮捕されて収監されてしまいます。

たまたま、この出来事を報道しようとしていたある人が、このガンジーの行動を見て、アメリカにイギリスから最初に移民の人たちが渡って来たときに、ボストンの港でイギリスの法律に反対して立ち上がった人たちが紅茶の葉っぱを海に捨てた「ボストン・ティーパーティー」（ボストン茶会事件）という出来事にとても似ていると報道したこともあります。

いずれにしても、ガンジーの抵抗は、最終的には成功して、再度政府はガンジーと妥協策を見出します。これは、ガンジーのサティアグラハの運動の成功でありました。このようにガンジーは、サティアグラハという運動をさまざまなところで展開します。例えば、増税に反対するときにもサティアグラハの運動を展開しましたし、さまざまな政府の抑圧に対しても非暴力の抵抗運動を推進しました。

有名な「塩の行進」もその一つです。当時、政府は塩に関しては独占状態でありました。つまり、貧困層の人たちは塩さえも簡単に手に入れることができない状態でありました。ガンジーは、「塩はただにするべきだ、少なくともこんなに高くするべきではない、もっと低い値段にするべきだ」と訴え、人々と一緒に海に向かって行進していきました。もちろんこれは法律違反になるのですが、海から塩を採取しようとしたのです。

この「塩の行進」のときにも大勢の人たちが逮捕さ

れて投獄されました。しかし、やはりこの非暴力の運動も、最終的にはガンジーの勝利で終わっています。

一ヵ月後の再会

ガンジーの生涯を物語る、また人々にいかに啓発を与えたかを伝えるエピソードがたくさんあります。いずれにしても、ガンジーは人類にとって、あるいは人間そのものにとって最も大事な価値観を教えた人でありました。

ガンジーの生き方でとても大事な点があると思います。ガンジーは、人々にさまざまなことを教えました。そして、まず自分自身がその教えを実践しました。その実践を通して教えを人々に施していったのです。ですから、一つの価値観をとってみても、彼は人にそれを教える前に自分自身が行動に移して実践しました。

その一つのエピソードですが、ある婦人が息子を連れてガンジーを訪ねてきました。「偉大な魂のガンジーさん、ちょっとお願いがあります」。ガンジーは、「どんなことなんですか、何でも言ってごらんなさい」と言います。この婦人は「私の息子にあまり砂糖を食べないように言ってください。あまり甘いものを食べないように言ってください」と言いました。

ガンジーは、その婦人と子どもと一緒に座って沈黙を続けました。婦人が「マハトマ、息子に砂糖を食べないように、甘いものを食べないように言ってください。私は常に言っているのですが、言うことを全然聞きません。でも、息子はあなたの言うことは聞きます。だから、簡単なことです。一言でいいので、そう言ってください」とお願いします。それでも、ガンジーは沈黙を続けます。何も言いません。そして、立ち上がって、「一ヵ月後にまた会いに来なさい」と言います。

一ヶ月たちました。婦人は男の子を連れてガンジーのところに来ました。ガンジーはその息子に向かって、「甘いものを食べるのはやめなさいね」と一言言いました。そうすると、この婦人はガンジーに「質問があります」と言って、息子に席を外させ、ガンジーと二人っきりになると、「一ヶ月前、私はあなたのところに来て息子に甘いものを食べるのをやめるように言ってください」と。

ガンジーは、婦人に言います。「一ヶ月前にあなたが私のところに息子さんを連れてきたときに、私自身も甘いものをたくさん食べていました。私が甘いものを食べているのに、どうしてあなたの子どもに甘いものを食べるなということができますか。まず、私が甘いものを食べるのをやめなければなりません。それも、一週間とか、二週間とかではなくて、一ヶ月は食べるのをやめなければ、私はあなたの息子さんに甘いものを食べるのをやめなさいとは言えません。私が、まず自分自身で甘いものを食べなくても大丈夫、甘いものを食べないようにできると実践し、実感しなければ、どうして人にそんなことを言うことができますか」と。そして、「私は一ヶ月間甘いものを食べていません。だから、あなたの息子さんにやめなさいと言えたのです」と言いました。最終的には子どもは甘いものを食べなくなったということです。

だからお願いしました。そのとき何も言わなかったのに、なぜ一ヶ月たったいま息子にあのように言ったのですか」と聞きます。

断食・性差別撤廃・祈り

もう一つ、とても大事なエピソードがあります。ガンジーは自分自身に対して大変に厳しい人でありました。何回も何回も断食を繰り返していました。強固に決意を立てて達成をしたいと思ったときには、ガンジーは断食を行いました。

その中でも最も厳しいものとなったのが一九二四年に二十一日間断食をしたエピソードです。

当時、インドでは、ヒンズー教徒とイスラム教徒の間でさまざまな衝突がありました。暴動もありました。ガンジーは、ヒンズー教徒とイスラム教徒の間の調和をもたらしたいと願い、断食をすることを決めます。食べ物は全く口にせず、口にしたのは水と少々の塩でありました。

二回目にかなり長期間にわたって断食をしたのは一九四七年です。ヒンズー教徒とイスラム教徒の間の対立が悪化して多くの悲惨な出来事が起きていました。また、インド中が分断されていた時代でありました。

暴動や衝突が頻発していました。何百人もの国民、市民が亡くなった時代でありました。このときにも、ガンジーは事態を終結させるために断食に入ります。そして、長期にわたって断食を続けるのですが、最終的にはヒンズー教徒とイスラム教徒の指導者が、ガンジーに「これ以上食べないと大変なことになってしまう。争いをやめるからあなたも断食をやめてください」とお願いしに来るという、結末になったのです。

最後に二つ、ガンジーの生涯に関わるエピソードを紹介したいと思います。

その一つが、ガンジーがいかに女性を大事にしていたかということであります。当時インドにも性差別が存在していました。ガンジー自身の周りには多くの女性のリーダーがいました。ガンジーは女性を大変に信頼し、頼りにしていました。女性たちは非常に信仰心もあつく、決意も強く、素晴らしいリーダーシップを発揮していました。やがてそのなかから国民党の要職に就くような女性も生まれたのです。

もう一つのエピソードは、ガンジーの人類のための祈りにまつわることです。ガンジーは、常に人類の親善と友愛のための祈りを捧げていました。その祈りはヒンズー語の「サブコ　サンマティ　デ　バグウォン(Sabko sanmati de bhagwan)」という祈りですが、ガンジーはそれを何度も何度も繰り返します。この言葉は、「人類のための親善と友愛」を意味しています。つまり、親善と対話が大事であるということです。

この祈りの言葉を聞くたびに、私は、いま現在私たちの周りで、世界で起きている残念な出来事に対して、この祈りを捧げたいという気持ちになります。最近マドリードでテロが発生しました。また、今朝のニュースでもお聞きになったと思いますが、イラクのバグダッドで、またどこかが爆破されました。「九・一一」の同時多発テロ以降、世界にはさまざまな形態のテロ行為が蔓延しております。

マハトマ　キー　ジャイ

ガンジーのこの祈りは、人々がお互いに対話をすることを可能にしよう、という内容にも訳すことができると思います。憎しみと誤解を、対話と理解、そして調和に変革しようという訴えです。これは、常に池田SGI会長が訴えている、「対話をしよう、戦争をやめよう、そして、連帯しよう、平和をもたらそう」という祈りと同じではないかと思います。

きょうは、皆様とこのような形で対話ができたことを大変に嬉しく思っております。ガンジーの偉大な実績について少しでも皆様と共有できたこと、分かち合えたことをとても嬉しく思っております。

私たちは生涯、マハトマ・ガンジー、マーティン・ルーサー・キングの掲げた価値観や意思、池田SGI会長が掲げておられる平和の理念と行動を決して忘れてはいけないと思います。

ガンジーはいろいろな人と会いました。その人たちが、その場から去るときにガンジーに対して言った言葉があります。ヒンズー語で、「マハトマ　キー　ジャイ(Mahatam ki jay)」という言葉だそうです。ガンジーを賛辞して、「偉大なるガンジーの長寿を」、「長く生きてください」というような意味の言葉です。

（ベッド　P・ナンダ／デンバー大学教授）

（本稿は、二〇〇四年三月十八日に行われた講演内容を編集部により編集したものです）